

アンドロジニー概念の再考と BSRI の妥当性の検討

泉 亜由美 (日本女子大学大学院生)

要約:

本研究の目的は①日本版 BSRI の妥当性の検討をすること、②BSRI と本研究の比較をすることであった。日本版 BSRI60 項目を用い、大学生 315 名に質問紙調査を行った。

①日本版 BSRI の妥当性の検討については、男性性、中性性、女性性の内容は現代の日本の青年期における性役割観を測定できているとあってよい。しかし本来中立的に作られた中性性の質問項目に社会的望ましさを男女差がみられる項目があり、性役割観の変容をうかがわせた。

②BSRI と本研究の比較については、現在男性にとって望ましいと考えられているものと女性にとって望ましいと考えられているものの差は少なくなってきたことが示唆された。また、男性自身は男性にとって女性性よりも男性性を望ましいと思っているのに対して、女性自身にはその差がなく、男性は自分自身に引き続き伝統的な性役割観をもっているが、女性は現在の過渡期的な性役割観を表すように、自分自身の性にとって望ましいものに対して流動的な見方をしていることがうかがわれた。

今後の課題として、アンドロジニーをより正確に測定し得る性役割スケールを考案する。特に修正の必要が検討される中性性については、男性性でも女性性でもないといった特性を表すものであるか、アンドロジニーの概念との関係性も考慮し、明確な概念的再構成がなされることが求められる。

キーワード: アンドロジニー, BSRI, 性役割観, 中間性

1. はじめに

男らしさと女らしさに関する論議は、男あるいは女という生物学的な性別に結び付けて展開された時代が長く続いた。それぞれの生物学的性にふさわしいとされる男らしさと女らしさという両極的な性役割を取得しパーソナリティが形成されることが、健全な社会化の過程において必要であると考えられていた。またこれらの男らしさと女らしさについての両極的な考え方は、産業革命が起き工業化した社会において「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が確立されたことによって、さらに深く社会に流布することになったのではないかと考えられる。

2. 問題

2-1. 性差に関することばの定義

まず男らしさと女らしさについて考えたとき、現在、性差に関することばには様々なものがある。例えば生物学的性、ジェンダーなどである。これらのことばはしばしば混乱を招くため、本研究で主要な概念に関わることばについてまとめておく必要があるだろう。

生物学的性：セックスとも呼ばれ、生物学的な差異に基づく性差。これまで生物学的性は男女という二分法に立っていたが、最近の医学などの分野で、生物学的性でさえも厳密に二分できないことは半陰陽 (hermaphrodisism) の研究でも明らかにされている。

ジェンダー：文化的・社会的な価値観が絡みついたときに生じる社会的性差。

性役割：それぞれの性に対して社会的に期待される行動様式や態度の総称。日常的には男らしさ、女らしさともいわれる。

男性性：男性に対して社会的に期待される行動様式や態度の総称。男らしさ。

女性性：女性に対して社会的に期待される行動様式や態度の総称。女らしさ。

心理的両性具有性 (Androgyny)：男らしさと女らしさの文化的定義に対応する自己概念を合わせもっている、あるいはジェンダーにふさわしいと文化的に定義される内容とまったく一致しない自己概念を持っていること (Bem, S.L., 1999)。

先に述べた生物学的性とジェンダーの定義については、最近では異なった見方も示されている。ジュディス・バトラー (1994, 1995) のようにジェンダーは単にあらかじめ与えられたセックスに対する文化的な意味の書き込みというだけでなく、ジェンダーはまさにセックスそのものを生産する文化装置であるといったジェンダー概念や、また、セックスも様々な科学的言説によって構成されているため「自然なるもの」「言説以前のもの」という特権的な立場を付与された「作られたもの」に他ならないという立場も示されている。これらの立場においてセックスが文化的な領域のものであるかどうかについては議論の余地があるが、ここでは生物学的な性差をセックス、文化的・社会的な性差をジェンダーと区別することにとどめる。

2-2. 男らしさと女らしさの測定

はじめに述べたような社会的背景の中で、心理学の分野で男らしさと女らしさを測定するために最初に作られたのが、ターマンとマイルズの M-F テスト (1936) である。その後もハザアウェイらの MF 尺度 (1943) などの性役割スケールあるいは性度

検査が次々に開発されてきた。これら初期のものに共通していることは、男性性と女性性を具体化し、一次元の両極に位置づけ、男性に典型的であるか、女性に典型的であるかを測定するものであったということである。男性的であると測定されればすなわち女性的でないとされ、女性的であると測定されればすなわち男性的でないとされ、男性的でもあり女性的でもあることはあり得ないとされていたのである。

しかし 1970 年代に入り、フェミニズムの台頭や女性の社会進出などによる社会変動に伴って、これまでの男らしさと女らしさについて疑問が呈されるようになったことは周知の通りである。このフェミニスト思潮の影響を受けて、新たな視点を備えた性役割スケールが開発されるようになった。まずベムによって「ベム性役割調査目録 (Bem Sex Role Inventory) (Bem, S.L., 1974)」(以下 BSRI と略す) が発表される。その後 1974 年と 1975 年にかけてスペンスらの Personal Attributes Questionnaire (以下 PAQ と略す), 1976 年にヘイルブランの The Masculinity-Femininity Scale of the Adjective Checklist (以下 ACL と略す) などが開発された。

2-3. アンドロジニー (Androgyny : 両性具有性)

これまで述べてきたように男らしさ、女らしさについて長い間確立していた一次元的な見方に対する新たな挑戦として、アンドロジニーに関する理論的・実証的研究がなされるようになる。そもそもアンドロジニーとは、古代ギリシャのことばで andro (男性) と gyn (女性) からできており (Heilbrun, C.G., 1964), 1 人の人間が男性性も女性性も共に合わせもつ概念のことである。この概念は男らしさと女らしさを 2 つの独立した次元としてとらえ、それぞれの性にふさわしいと社会的に付与された言動を解放しその場に合った言動をとり得ることを提唱した点で非常に画期的であった。

しかし、アンドロジニー概念はジェンダーの不平等を理論化していないことや、結局はジェンダーの両極化を再生産するなどの批判を受けることになる。また BSRI の尺度構成上の問題点なども指摘された。これらの批判を受け、ベムは研究の焦点をアンドロジニーからジェンダー・スキマティシティへ変えているが、ベム自身アンドロジニーを決定的に否定するまでの批判を見出すまでには至っていないと述べている (Bem, 1999)。先述のような批判はあるが、アンドロジニーがこれまでにフェミニスト理論家たちに対して、さらに今日でも一人の男性としてあるいは女性としてどのように振る舞ったらよいか混乱している多くの人々に対して、理想的な状態を考えるための視点や精神健康のモデルを提供していることは明らかである (Bem, 1999)。また、これまで様々な研究においてもアンドロジニーと心理的適応の積極的な関係について示されてきた。近年の性役割観の多様化によって、性役割をとらえるうえで、男女という既成の枠組みでとらえることは必ずしも有効ではないことは既に検証されて

おり (泉, 2002), これからの性役割観においてアンドロジニーの概念は有用であり注目すべきであると考える。

2-4. わが国における性役割観の動向

近年, 性役割についての考え方が多様化し, 日本でも深く根付いていた「男は仕事, 女は家庭」という伝統的性別役割分業意識は崩れつつあるかに見える。しかし, その一方でわが国における男性の育児休業取得率は 0.42%と極めて小さく (厚生労働省, 1999), 「男は仕事, 女は家事も育児も仕事も」という状況が依然として続いている。

福本, 泉 (2003) が述べているように, 従来の性役割の枠から出ようとしなない生き方が存続することは, 男性にとっての人生が結局は仕事だけのものになってしまう危険性を意味しているともいえる。このことは, 一個の人間として決して望ましいとは言い難い生き方である。また男女共同参画社会を迎えた現在 (いま), 従来の男性の生き方は, 男性自身を人間的に豊かで自立した生き方から引き離すだけでなく, 女性の自立と自由な生き方の妨げにもなっているともいえるのである。このようなわが国における性役割観の動向を鑑み, 性別よりも“一人の人間として” どう生きるかが問われる中で, 男らしさと女らしさの文化的定義に対応する自己概念を合わせもっている, あるいはジェンダーにふさわしいと文化的に定義される内容とまったく一致しない自己概念を持っている (Bem, S.L., 199) アンドロジニアスな人についての再考を行うことは研究的意義が深いと考えられる。

3. 目的

以上を承けて, 本研究では次のことを目的とする。

目的①アメリカでもアンドロジニーの研究に最も多く用いられ, 日本国内でも広く用い

られている日本版 BSRI (安達, 上地, 浅川, 1985) の妥当性の検討をすること。日本版 BSRI が現在の日本の青年期においても適用可能か否かを明らかにしたい。BSRI および日本版 BSRI 考案の際に大学生を対象としているため, 本研究においても同様に大学生を対象として検討することとした。

目的②BSRI と本研究の比較をすること。およそ 30 年前にアメリカで作成された BSRI と本研究を比較することで, 変容しつつある性役割観を知る手がかりにしたい。

これら 2 点について検討する。また, 日本版 BSRI の吟味や BSRI との比較を通して, 青年たちが抱く現代の日本社会の性役割に対するイメージの現状についての示唆を得ることができるのではないかと考える。伝統的性別役割分業意識が崩れ, 性役割観

が多様化しつつある，いわば性役割観の過渡期とも言うべきこの時期に，性役割観の現状を把握しておくことは意義深い研究課題と考えられる。

4. 方法

4-1. 調査内容・回答法

日本版 BSRI を用いる。すなわち，男性性特性を示す 20 項目，中性性特性を示す 20 項目，女性性特性を示す 20 項目の計 60 項目（附表 1，附表 2）。回答は，以下に示す 2 通りである。「次にでてくることばは，日本の社会において，男性にとって，どれくらい望ましいと考えられていると思いますか。」（こちらの質問紙を「向男性質問紙」と呼ぶ）および，「次にでてくることばは，日本の社会において，女性にとって，どれくらい望ましいと考えられていると思いますか。」（こちらの質問紙を「向女性質問紙」と呼ぶ）である。対象者は合計 120 項目について 1「非常に望ましくない」，2「あまり望ましくない」，3「やや望ましくない」，4「どちらでもない」，5「やや望ましい」，6「かなり望ましい」，7「非常に望ましい」の 7 段階評定で回答する。

4-2. 調査対象者

東京都内 A 大学の学生，愛知県内 B 大学の学生，その他。回収については，授業時等に集団的調査を行った。回答を得た対象者数は，A 大学 136 名，B 大学 147 名，その他 32 名。

計 315 名。

4-3. 調査対象者の属性

男性：126 名。年齢は 18 歳から 30 歳で，平均年齢は 20.0 歳（SD3.18 歳）であった。

女性：187 名。年齢は 18 歳から 30 歳で，平均年齢は 19.0 歳（SD1.36 歳）であった。

中間性^{注 1)} 1 名，無回答 1 名。今回の報告では，データ数の関係上この 2 名についてはデータから割愛することとし，男性と女性から得られた回答のみを用い分析を行うことにする。

4-4. 調査時期

2002 年 6 月から 7 月。

5. 結果と考察

向男性質問紙 (60 項目) についての、男性性、中性性、女性性各得点の平均値と標準偏差を附表 1 に、向女性質問紙 (60 項目) についての、男性性、中性性、女性性各得点の平均値と標準偏差を附表 2 に示す。

5-1. 目的④日本版 BSRI の妥当性の検討についての結果と考察

(1) 因子分析

まず項目全体の構造を知るために、因子分析を行う。向男性質問紙、向女性質問紙、それぞれの全回答データにもとづいて、因子分析を行い主因子解を求めてプロマックス回転を行った。^{注 2)} 向男性質問紙 60 項目については、抽出された 3 因子までで全分散の 42.78% が説明された (Table1)。向女性質問紙 60 項目については、抽出された 3 因子までで全分散の 50.4% が説明された (Table2)。安達ら (1985) と比較すると中性性と女性性の項目内容にやや違いが見られるが、不適切な項目を除けばほぼ類似した結果を得ており、ここでは安達ら (1985) と同様の命名をすることにする。向男性質問紙の第 1 因子は男性にとって望ましいと考えられている男性性であるので「男性性 M」、第 2 因子は男性にとって望ましいと考えられている中性性であるので「中性性 M」、第 3 因子は男性にとって望ましいと考えられている女性性であるので「女性性 M」と呼んで用いることにする。^{注 3)} 同様に、向女性質問紙の第 1 因子は女性にとって望ましいと考えられている男性性であるので「男性性 F」、以下、第 2 因子は「女性性 F」、第 3 因子は「中性性 F」と呼んで用いることにする。^{注 4)}

(2) 信頼性分析

本研究における各尺度それぞれの内的整合性を検討するために信頼性分析を行った。その結果を Table3 に示す。男性性 M ($\alpha=.9485$)、男性性 F ($\alpha=.9584$)、中性性 M ($\alpha=.8847$)、中性性 F ($\alpha=.9025$)、女性性 M ($\alpha=.8894$)、女性性 F ($\alpha=.9374$) と全尺度について信頼性が得られている。

(3) 社会的望ましさの男女差

各質問項目 (60 項目) について、向男性質問紙と、向女性質問紙の平均値の差の検定を行った (Table4)。その結果、Table4 に示すように、男性性 (20 項目) については、全項目に関して女性よりも男性の方が有意に望ましいと考えている。また同様に、女性性 (20 項目) についても、全項目に関して男性よりも女性の方が有意に望ましいと考えていることが分かる。中性性 (20 項目) については、女性よりも男性の方が有意に望ましいと考えられている項目が 5 項目、男性よりも女性の方が有意に望ましい

と考えられている項目が7項目、有意な差がみられなかった項目が8項目であった。日本版BSRIでは中性性は社会的望ましさの点で男女差がない項目からなっていたため、本研究とは結果が異なっている。

(4) 考察

本研究の1つめの目的である目的①日本版BSRIの妥当性の検討についての考察を述べる。因子分析、信頼性分析、社会的望ましさの男女差の分析の結果から、日本版BSRIの男性性、中性性、女性性の内容は、大まかなところでは現代の日本の青年期において適用に妥当な項目で構成されていると考えることができる。

社会的望ましさの男女差の分析(Table4)では、男性性については全項目に関して女性よりも男性の方が、女性性については全項目に関して男性よりも女性の方がそれぞれ有意に望ましいと考えられていた。因子分析では、男性性M、男性性Fと女性性M、女性性Fは日本版BSRIとほぼ同様の結果を得、信頼性も高かった。つまり男性性(20項目)と女性性(20項目)は、今の日本の青年期において、男性、または女性にとって望ましいと考えられている性役割観を表しているといえる。本研究においては、中性性M、中性性Fの間に、社会的望ましさの男女差がみられる項目が含まれていることが明らかとなった。本来中立的な項目であるべき中性性に男女差がみられたことは、性役割観が変容してきていることをうかがわせる。

5-2. 目的②BSRIと本研究の比較についての結果と考察

次にBSRIと本研究の比較をするため、Bem,S.L.(1974)と同じ分析を行うことにする。30年前にアメリカで作成されたBSRIと本研究のデータを比較することは、BSRIの各時代における尺度としての吟味をするうえで基本的な分析として重要であると思われる。それと同時に、比較文化的なアプローチでよく用いられるように、時代や国の異なるデータを比較することによって、本研究においては性役割観の推移を知り得る手がかりともなり、これからの性役割観を展望することにも寄与するものと考えられる。

BSRIとの比較において、比較の結果現れる差に関する原因が、時代が異なるからなのか、国が異なるからなのか等、様々な要因が考えられることが予想される。そのような本研究のデータのみでは解釈しきれない要因もあることに配慮しつつ、本研究ではBSRIと同年代の対象者という点で条件を統制し、その条件の範囲内においてBSRIと比較を行うものとする。したがって本研究で述べる結果は、考えられる様々な要因のうちのひとつであり、今後他の要因についての検討が必要であることをここで確認しておきたい。

(1) <男女別>社会的望ましさの男女差

「5-1. (3) 社会的望ましさの男女差」で各項目(60項目)について、向男性質問紙と、向女性質問紙の平均値の差の検定を行ったが(Table4)、それをさらに男性の回答、女性の回答別に分けて、社会的望ましさの男女差の検定を行う(Table5)。また、Bem,S.L.(1974)の結果をTable6に示す。本研究(Table5)とBem,S.L.(Table6)を比較するとどちらにおいても、男性の回答、女性の回答ともに、男性性においては女性よりも男性にとって有意に望ましく、女性性においては男性よりも女性にとって有意に望ましいと考えられていることが分かる。しかし本研究(Table5)とBem,S.L.(Table6)の平均値の差をみると、Bem,S.L.(Table6)よりも本研究(Table5)の方が平均値の差がいずれも小さくなっている。

したがって、Bem,S.L.(1974)の時よりは社会的望ましさの男女差が小さくなってきている可能性が考えられる。現在、男性にとって望ましいと考えられているものと女性にとって望ましいと考えられているものの差は少なくなっているのではないかと考えられる。「5-1. (4) 考察」で述べたが、青年期の性役割観の現状として伝統的な男女の概念的形式(ジェンダーステレオタイプ)をいまだ残しながらも、ここでは性別よりもむしろ一人の人間として自己や他者をとらえていこうとする性役割観の変化の兆候をうかがうことができたのではないだろうか。

(2) <男女別>自分自身の性における社会的望ましさ

本研究とBem,S.L.(1974)を比較するうえで、特に注目すべきであるのは<男女別>自分自身の性における社会的望ましさについてである。全データを男女別にし、向男性質問紙の男性性Mと女性性Mの平均値の差の検定、および向女性質問紙の女性性Fと男性性Fの平均値の差の検定を行う(Table7)。同様に、Bem,S.L.(1974)の結果をTable8に示す。Bem,S.L.(1974)では男性自身が男性にとって望ましいと思う男性性は女性性よりも有意に高く、また女性自身が女性にとって望ましいと思う女性性は男性性よりも有意に高かった(Table8)。しかし、本研究では男性自身が男性にとって望ましいと思う男性性Mは女性性Mよりも有意に高かったが、女性自身が女性にとって望ましいと思う女性性Fと男性性Fには有意差が見られなかった(Table7)。

つまり、男性自身は男性にとって女性性よりも男性性を望ましいと思っているのに対して、女性自身にはその差がないことが分かった。Bem,S.L.(1974)と比較すると、男性は自分自身に対して引き続き伝統的な性役割観をもっているが、女性は現在の過渡期的な性役割観を表すように、自分自身の性にとって望ましいものに対して流動的な見方をしていることがうかがわれる。一般に男性より女性の方が意識の変化が大きく、平等志向も強いといわれるが、本研究でもその傾向が示唆されたのではないだろ

うか。この点が、Bem,S.L. (1974) の結果と大きく異なるところである。

(3) 考察

本研究の2つめの目的である、目的②BSRI と本研究の比較についての考察を述べる。Table5 と Table 7の結果をまとめると、男性性 M は、現段階でも非常に固定的な安定した尺度であり、現在の日本の青年期においても男性性の尺度として充分弁別力が高いと考えることができる。

一方、女性性 F は、男女別で分析した場合に、女性の女性性 F と男性性 F には有意差が見られず (Table 7)、女性の中で自分自身の性に対する社会的望ましさの認知が変容しつつあるといえる。また向男性質問紙の項目の因子分析 (Table 1) でも、女性性を示す因子の項目内容や、不適切な項目がやや多く含まれていることから、女性性の変容をうかがうことができる。このことから現時点においては、女性性については尺度としての信頼性も高く (Table3)、現在の日本においても適用可能であるが、今後再検討の余地はあると考えてよい。

中性性に関しては、これまでの因子分析 (Table 1, Table 2) などの結果を総合的に考えて、項目の追加修正が必要であると考えられる。現在の性役割観が過渡期的な状態であることから、BSRI の中での中性性はより重要な特性となりうるであろう。

6. 今後の課題

本研究での結果をもとに、以下に述べる点について BSRI を改良することが期待される。BSRI の改良すべき点としては、「5-2. (3) 考察」でも述べたように、BSRI がこれからの日本により適合した尺度テストとして用いられるために、女性性については項目を再検討することが求められる。中性性については、Bem,S.L. (1974) での社会的望ましさをあらかず項目に、どのような項目を追加修正していくかを模索することは今後の課題といえる。BSRI では、ややもすると中性性がアンドロジニーと混同されがちである。中性性が、男性性でも女性性でもないといった特性を明らかにするためのものであるのか、また、アンドロジニーの概念との関係性も考慮したうえで明確な概念的再構成がなされることが必要となってくるであろう。またアンドロジニー的な生き方とは、男性でも女性でもないどっちつかずな生き方なのではなく、男性としても女性としても振舞える豊かな選択肢をもてる生き方であるということを改めて確認したい。BSRI の中性性をより現在の日本に適合したものにしていく過程は、これからの新たな性役割観を展望することにも繋がってゆくと考えられる。

また BSRI の中性性項目を再検討するとともに、筆者は近年考案されている ISRI (伊藤, 1986) なども参考にして、アンドロジニーをより正確に測定しうる新たな性

役割スケールの考案を試みている。それは、男性性と女性性の合成得点でアンドロジニーを測定した BSRI と異なり、男らしさと女らしさの文化的定義に対応する自己概念を合わせもっている、あるいはジェンダーにふさわしいと文化的に定義される内容とまったく一致しない自己概念を持っているというアンドロジニーを直接的に測定することが可能な尺度である。筆者によって考案された尺度項目は以下の 10 項目である (泉, 2005)。

日常生活において、性別にとらわれず行動するほうである

“女性向け”と思われている役割・仕事をするに抵抗がある

“男性向け”と思われている役割・仕事をするに抵抗がある

自分は男らしい部分と、女らしい部分の両面を合わせもっている

自分は、男性、女性という性別にとらわれず一人の人間として生活していると思う

男性っぽい言動をとる女性に違和感をおぼえる

女性っぽい言動をとる男性に違和感をおぼえる

自分は状況に合わせて、強く主張することも、人に従うこともできる

自分に子どもがいたら、父親の役割も母親の役割も場合によってはできると思う

自分は育児・家事も仕事もうまくできるタイプだと思う

泉 (2005) の調査で上記 10 項目の因子構造分析、BSRI のアンドロジニー得点との相関分析、尺度としての信頼性分析などが行われた結果、下記 4 項目をアンドロジニースケールとして妥当なものとして選定した。ここで新たなアンドロジニースケールを提案し、今後汎用化、実用化に向けてさらに予備調査をすすめることを今後の課題とする。

アンドロジニースケール (泉, 2005)

1. 日常生活において、性別にとらわれず行動するほうである
2. 自分は男らしい部分と、女らしい部分の両面を合わせもっている
3. 自分は、男性、女性という性別にとらわれず一人の人間として生活していると思う
4. 自分は状況に合わせて、強く主張することも、人に従うこともできる

7. 謝辞

本稿の執筆にあたり、直接のご助言、ご指導いただきました日本女子大学家政学部教授福本俊教授に心よりお礼申し上げます。また、調査にご協力くださった学生のみなさまに感謝申し上げます。

8. 注

- 注1) 筆者らの最近の調査においては、質問紙内の性別についての質問項目に関して、性の3区分を提唱している。男性、中間性、女性である。生物学的性は、男性あるいは女性という2分法では不十分であるという考え方にもとづいている。
- 注2) バリマックス回転とプロマックス回転を行ったが、因子間の相関が高かったので、プロマックス回転による結果を用いることにした。
- 注3) 各因子名の後ろには、向男性質問紙を表す M (male) をつけた。
- 注4) 各因子名の後ろには、向女性質問紙を表す F (female) をつけた。

9. 参考文献

- 安達圭一郎, 上地安昭, 浅川潔司: 男性性・女性性・心理的両性性に関する研究 (I) —日本版BSRI作成の試み—, 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 484—485, (1985)
- Bem, S.L.: The measurement of psychological Androgyny, *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42(2), 155—162, (1974)
- サンドラ L. ベム, 福富護訳: ジェンダーのレンズ, 川島書店, (1999)
- 福本俊, 泉亜由美: Home Straight Study (HOSS) 事始め, 日本女子大学紀要 家政学部, 51, 61-67, (2003)
- Heilbrun, C.G.: *Toward a Recognition of Androgyny*, W.W.Norton & Company, New York, X, (1973)
- 伊藤裕子: 性役割特性語の意味構造—性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み—, 教育心理学研究, 34 (2), 168—174, (1986)
- 泉亜由美: 性役割観についての研究—BSRIの妥当性の吟味と新たな性役割観の展望—, 日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間生活学研究科, 8, 53—58, (2002)
- 泉亜由美: 性役割観についての研究 第3報—“Androgynyな生き方”と“一人の人間として生きること”の包括的な尺度作成の試み—, 日本女子大学大学院紀要 家

政学研究科・人間生活学研究科, 11, (2005)

ジュディス・バトラー, 荻野美穂訳: セックス/ジェンダー/欲望の主体, 思想, 12, 岩波書店, (1994)

ジュディス・バトラー, 荻野美穂訳: セックス/ジェンダー/欲望の主体, 思想, 1, 岩波書店, (1995)

厚生労働省 (1999)

附表1 向男性質問紙の各項目、および男性性、中性性、女性性の平均値と標準偏差

質問項目	平均値	標準偏差	N	特性	平均値	標準偏差	N
1. 統率力のある	5.63	1.12	314	男性性	5.71	.81	304
2. 積極的な	5.62	1.04	313				
3. やる気のある	5.88	1.11	313				
4. 判断力のある	6.17	1.02	313				
5. 自己主張のできる	5.63	1.11	313				
6. たくましい	5.73	1.19	313				
7. 頼りがいのある	6.14	1.02	313				
8. 信念のある	5.84	1.16	313				
9. 意志の強い	5.80	1.11	314				
10. 力強い	5.53	1.22	314				
11. 指導力のある	5.42	1.16	314				
12. 独立心のある	5.43	1.26	313				
13. 行動力のある	5.89	1.00	313				
14. 決断力のある	5.99	1.02	313				
15. 男らしい	5.33	1.39	313				
16. 自立した	5.79	1.14	314				
17. 勇敢な	5.65	1.18	313				
18. 精神的に強い	5.76	1.16	313				
19. 明確な態度のとれる	5.58	1.12	312				
20. 冒険心のある	5.04	1.18	314				
21. 人情味のある	5.41	1.20	314	中性性	3.87	.39	312
22. 正直な	5.49	1.25	314				
23. 画一的な	4.05	1.41	314				
24. 快活な	5.36	1.12	314				
25. 地道な	4.91	1.24	314				
26. おろかな	2.34	1.29	314				
27. 陰うつな	2.07	1.09	314				
28. おおらかな	5.32	1.09	314				
29. 理解を示す	5.51	1.15	313				
30. 協調性のない	2.29	1.23	314				
31. ふまじめな	2.22	1.25	314				
32. 軽率な	2.09	1.15	314				
33. 社会性のある	5.32	1.24	314				
34. つまらない	2.46	1.24	314				
35. 不道德な	1.88	1.15	314				
36. 心のせまい	1.92	1.07	314				
37. 誠実な	5.74	1.11	314				
38. 怠惰な	2.23	1.18	314				
39. ユーモアのある	5.37	1.08	314				
40. 誰に対しても平等に接 することのできる	5.37	1.27	313				
41. 母性のある	4.22	1.13	314	女性性	4.78	.67	305
42. 明るい	5.50	1.04	313				
43. ちゃめつけのある	4.73	1.18	313				
44. 思いやりのある	5.96	.97	314				
45. 純粋な	5.09	1.21	314				
46. 人に尽くす	4.57	1.22	311				
47. 女らしい	2.84	1.34	314				
48. 繊細な	3.86	1.27	311				
49. 親切な	5.53	1.05	313				
50. 素直な	5.33	1.18	313				
51. 子どもをかわいがる	5.58	1.20	313				
52. 謙虚な	4.94	1.32	313				
53. 人に気をつかう	5.06	1.16	313				
54. 慎み深い	4.65	1.21	313				
55. しとやかな	3.81	1.22	313				
56. 愛きょうのある	4.96	1.17	313				
57. やさしい	5.87	1.10	312				
58. もの静かな	3.86	1.25	312				
59. あたたかい	5.60	1.10	313				
60. 従順な	3.76	1.33	313				

附表2 向女性質問紙の各項目、および男性性、中性性、女性性の平均値と標準偏差

質問項目	平均値	標準偏差	N	特性	平均値	標準偏差	N
1. 統率力のある	4.95	1.19	309	男性性	5.10	.91	306
2. 積極的な	5.30	1.07	309				
3. やる気のある	5.65	1.12	309				
4. 判断力のある	5.71	1.08	309				
5. 自己主張のできる	5.44	1.18	309				
6. たくましい	4.42	1.47	309				
7. 頼りがいのある	5.11	1.19	309				
8. 信念のある	5.60	1.17	309				
9. 意志の強い	5.61	1.16	308				
10. 力強い	4.29	1.42	309				
11. 指導力のある	4.99	1.25	309				
12. 独立心のある	5.06	1.33	309				
13. 行動力のある	5.47	1.14	309				
14. 決断力のある	5.48	1.16	307				
15. 男らしい	3.40	1.42	309				
16. 自立した	5.24	1.20	309				
17. 勇敢な	4.64	1.33	309				
18. 精神的に強い	5.58	1.14	309				
19. 明確な態度のとれる	5.46	1.14	309				
20. 冒険心のある	4.54	1.29	309				
21. 人情味のある	5.61	1.11	308	中性性	3.89	.39	300
22. 正直な	5.74	1.10	309				
23. 画一的な	3.92	1.44	308				
24. 快活な	5.54	1.13	308				
25. 地道な	5.04	1.25	309				
26. おろかな	2.02	1.13	306				
27. 陰うつな	1.98	1.08	306				
28. おおらかな	5.54	1.16	305				
29. 理解を示す	5.62	1.17	306				
30. 協調性のない	2.21	1.23	305				
31. ふまじめな	2.03	1.12	306				
32. 軽率な	2.03	1.18	306				
33. 社会性のある	5.48	1.23	305				
34. つまらない	2.45	1.15	306				
35. 不道徳な	1.81	1.05	306				
36. 心のせまい	2.01	1.13	306				
37. 誠実な	5.62	1.16	306				
38. 怠惰な	2.26	1.24	306				
39. ユーモアのある	5.29	1.12	306				
40. 誰に対しても平等に接することのできる	5.67	1.22	306				
41. 母性のある	5.95	1.13	306	女性性	5.44	.77	301
42. 明るい	5.85	1.06	306				
43. ちゃめつけのある	5.50	1.13	306				
44. 思いやりのある	6.10	.96	305				
45. 純粋な	5.60	1.15	305				
46. 人に尽くす	4.99	1.36	306				
47. 女らしい	5.39	1.31	306				
48. 繊細な	5.12	1.25	306				
49. 親切な	5.87	1.00	306				
50. 素直な	5.70	1.04	306				
51. 子どもをかわいがる	6.05	1.11	306				
52. 謙虚な	5.11	1.23	306				
53. 人に気をつかう	5.34	1.12	307				
54. 慎み深い	5.10	1.12	307				
55. しとやかな	5.11	1.21	307				
56. 愛きょうのある	5.61	1.04	306				
57. やさしい	6.02	.96	306				
58. もの静かな	4.28	1.18	306				
59. あたたかい	5.88	1.02	306				
60. 従順な	4.24	1.44	306				

Table1 社会的望ましさの男女差の検定

特	質問項目	男性にとって望		女性にとって望ましい(F)	t 値	
男	1. 統率力のある	5.63	>	4.95	8.68	***
	2. 積極的な	5.62	>	5.30	4.47	***
	3. やる気のある	5.88	>	5.65	3.72	***
	4. 判断力のある	6.17	>	5.71	7.56	***
	5. 自己主張のできる	5.63	>	5.44	3.02	**
	6. たくましい	5.73	>	4.42	13.22	***
	7. 頼りがいのある	6.14	>	5.11	12.62	***
	8. 信念のある	5.84	>	5.60	3.55	***
	9. 意志の強い	5.80	>	5.61	2.99	***
	10. 力強い	5.53	>	4.29	12.96	**
	11. 指導力のある	5.42	>	4.99	5.33	***
	12. 独立心のある	5.43	>	5.06	5.26	***
	13. 行動力のある	5.89	>	5.47	6.44	***
	14. 決断力のある	5.99	>	5.48	7.34	***
	15. 男らしい	5.33	>	3.40	16.62	***
	16. 自立した	5.79	>	5.24	7.78	***
	17. 勇敢な	5.65	>	4.64	12.07	***
	18. 精神的に強い	5.76	>	5.58	2.70	**
	19. 明確な態度のとれる	5.58	>	5.46	2.16	*
	20. 冒険心のある	5.04	>	4.54	6.45	***
中	21. 人情味のある	5.41	<	5.61	-3.06	**
	22. 正直な	5.49	<	5.74	-3.49	**
	23. 画一的な	4.05	>	3.92	2.03	*
	24. 快活な	5.36	<	5.54	-2.86	**
	25. 地道な	4.91	<	5.04	-1.65	*
	26. おろかな	2.34	>	2.02	5.06	***
	27. 陰うつな	2.07	>	1.98	1.79	**
	28. おおらかな	5.32	<	5.54	-3.60	***
	29. 理解を示す	5.51	n.s.	5.62	-1.40	
	30. 協調性のない	2.29	n.s.	2.21	1.40	
	31. ふまじめな	2.22	>	2.03	3.27	**
	32. 軽率な	2.09	n.s.	2.03	.60	
	33. 社会性のある	5.32	<	5.48	-2.25	*
	34. つまらない	2.46	n.s.	2.45	.35	
	35. 不道德な	1.88	n.s.	1.81	1.23	
	36. 心のせまい	1.92	n.s.	2.01	-1.18	
	37. 誠実な	5.74	>	5.62	1.72	*
	38. 怠惰な	2.23	n.s.	2.26	-.45	
	39. ユーモアのある	5.37	n.s.	5.29	1.22	
	40. 誰に対しても平等に	5.37	<	5.67	-4.55	***
女	41. 母性のある	4.22	<	5.95	-20.58325	***
	42. 明るい	5.50	<	5.85	-6.671678	***
	43. ちゃめっけのある	4.73	<	5.50	-10.81782	***
	44. 思いやりのある	5.96	<	6.10	-2.609691	*
	45. 純粋な	5.09	<	5.60	-7.42	***
	46. 人に尽くす	4.57	<	4.99	-5.41	***
	47. 女らしい	2.84	<	5.39	-21.70082	***
	48. 繊細な	3.86	<	5.12	-14.86276	***
	49. 親切的な	5.53	<	5.87	-6.078226	***
	50. 素直な	5.33	<	5.70	-6.00	***
	51. 子どもをかわいがる	5.58	<	6.05	-7.85	***
	52. 謙虚な	4.94	<	5.11	-2.47	*
	53. 人に気をつかう	5.06	<	5.34	-4.67	***
	54. 懐み深い	4.65	<	5.10	-6.52	***
	55. しとやかな	3.81	<	5.11	-14.01	***
	56. 愛きょうのある	4.96	<	5.61	-9.32	***
	57. やさしい	5.87	<	6.02	-2.66	**
	58. もの静かな	3.86	<	4.28	-5.65	***
	59. あたたかい	5.60	<	5.88	-4.81	***
	60. 従順な	3.76	<	4.24	-5.89026	***

n.s.:nonsignificant, ***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05

Table2 <男女別>社会的望ましさの男女差

項目	男性の回答の平均値 (n=126)			女性の回答の平均値 (n=187)		
	男性性	女性性	中性性	男性性	女性性	中性性
男性にとって望ましい(M)	5.62	4.74	3.86	5.77	4.81	3.86
女性にとって望ましい(F)	4.79	5.48	3.87	5.32	5.41	3.90
平均値の差	.83	.74	.01	.45	.60	.04
<i>t</i>	9.78***	-10.43***	-.24	7.12***	-11.69***	-1.69

***:p<.001

Table3 Mean social desirability ratings of the Masculine, Feminine, and Neutral items (Bem,S.L.,1974)

Item	Male judges			Female judges		
	Masculine item	Feminine item	Neutral item	Masculine item	Feminine item	Neutral item
For a man	5.59	3.63	4.00	5.83	3.74	3.94
For a woman	2.90	5.61	4.08	3.46	5.55	3.98
Difference	2.69	1.98	.08	2.37	1.81	.04
<i>t</i>	14.41***	12.13***	.17	10.22***	8.28***	.09

***:p<.001

Table4 <男女別>自分自身の性における社会的望ましさの差の検定

項目	男性にとって望ましいと思う(M) 男性の回答の平均値	女性にとって望ましいと思う(F) 女性の回答の平均値
男性性	5.61	5.30
女性性	4.76	5.42
平均値の差	.85	.12
<i>t</i>	9.50***	-1.71

***:p<.001

Table5 Mean social desirability ratings of the Masculine and Feminine items for one's own sex (Bem,S.L.,1974)

Item	Male judges for a man	Female judges for a woman
Masculine	5.59	3.46
Feminine	3.63	5.55
Difference	1.96	2.09
<i>t</i>	11.94***	8.88***

***:p<.001